

アウグスティヌスの 懐疑論批判

岡部 由紀子 著

創
文
社
刊

アウグスティヌスの懐疑論批判

岡部 由紀子 著



創文社

岡部 由紀子 (おかべ ゆきこ)

1973年東京大学文学部卒業。1979年熊本大学非常勤講師。1983年銀杏学園短期大学専任講師を経て現在同教授。

〔アウグスティヌスの懐疑論批判〕

ISBN4-423-17115-5

1999年2月25日 第1刷印刷

1999年2月28日 第1刷発行

著 者 岡 部 由 紀 子

発行者 久 保 井 浩 俊

印刷者 安 達 精 治

発行所 〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-7 株式会社 創 文 社
電話(3263)7101 振替 00120-0-92472 会社

Printed in Japan 晩印刷・鈴木製本

凡 例

- * 以下で述べるアウグスティヌスの著作名、聖書の諸書名などについてはほぼ慣例に従っている（324 頁以下の一覧を参照）。
- * テキストについては vii 頁参照。また、CA のテキスト言及箇所を明示するために、CC 版の行数を示す。これまでのアウグスティヌス研究史では、巻、章、節の順に示すことが慣例であるが、近年ようやく行数表示の基盤が整ってきた（知る限りで CA に関して、King 1995 はその先駆けとなった）。CC 版の行数は章ごとにつけられており、これまでの拙論では節の表示を省いてきたが、従来の慣例にも対応するため、巻、章、節、行数の 4 種類の数字を挙げることにした。ローマ数字は巻数、別体は行数である。例えば、II. 11. 26. 21 は、第 II 巻第 11 章第 26 節 21 行目を指す（第 11 章の 21 行目は第 26 節の 1 行目に相当している）。前後から明瞭な場合には巻、章、節数を省くこともある。
- * 本書の中で別の箇所を言及する際には、原則として矢印と頁数を示す。脚註については、頁数を併記する。例えば、本書 12n. 22 は、「本書 12 頁の脚註 22 番参照」を意味する。
- * CA 以外のアウグスティヌスの著作及び他の古典文献の表記については慣例に従う。近代以後の研究書等に言及する場合、著者名、出版年、頁数で表わすが、略号表に示した諸著については出版年を省く。

テキストについて

参照した校訂版とその略号は以下の通りである（詳しくは文献表参照）。

Era Editio Erasmi, Frobeniana, t.1, 1569

Mau Editio Maurinorum, 1679 in *PL*, 32, 1865; and also in *BA*, 1939

Jv * R. Jolivet, *Bibliothèque Augustinienne*, t.4, 1948

Kn P. Knöll, *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum* (CSEL), 63, 1922

Str W. M. Green, *Stromata Patristica et Mediaevalia* II, 1956

CC W. M. Green, *Corpus Christianorum Series Latina*, 29, 1970

* Jv は羅仏対訳本。テキストは Mau に依拠すると述べるが (p. 11), 若干の相違がある。

以下の翻訳において底本としたのは CC である。第一に、行数を指定するための共通のテキストとして利用可能な唯一のものだからであり、第二に、出版されている最も新しい版として現代の研究者に共有されているからである。それ以外の版は、古書や複写コピーによってしか入手できない。

CC のための序文で Green は写本の伝統について簡単に述べている（詳しくは Kn, praefatio, pp. 3-12）。それによれば、12世紀以前の写本 MSS は殆どなく、9-11世紀の写本によるもの (α : HMPR) と 11-12世紀の写本によるもの (β : ST) との拮抗する二つの系統がある。興味深いことに、CA と *Ord.* は普通一緒にされているが、BV は別の伝承にあるという。しかし、私は写本について発言することはできない。

CC 以外の版に従って読んだ箇所について、別表に示した。ところで CC 版は、同じ校訂者によって少し前に出された Str から CC に再録された際に生じたと考えられる誤植が少なくない。Str は、入手し難いだけでなく、その行数表示は Str 固有のものであるために底本にするには不適當であるが、Str によって CC の誤植を確認することができた。小著のなかで CC と呼んでいるのは、従って、Str によって訂正された CC テキストのことである。

Green によるテキストには、表記上の不統一も随所に見られる。

例: conp-, comp-: cf. comprehendi (II. 5. 11. 11), comprehendi (II. 5. 11. 15)

ads-, ass-: cf. assensionis (II. 5. 12. 32), adsensione (II. 11. 26. 22-23)

読んでいるときには気にならないことが、データの電子化が一般化してきた現代、テキストファイルの検索上やや不便であることは否めない。これらについてはどうする

こともできなかった。

引用などの際には CC に従い、大文字を除いては *v* は *u* に、*j* は *i* に統一している。

左側が CC、——の右側は小著が採用したテキストである。() 内は CC 以外の読みを示す。また、近年テキストに言及している P. King (Kg) 及び J. Doignon (Dg) も付け加える。*印は、小著が CC に従っている、近年問題となっている箇所を参考のために挙げるものである。別体は章ごとの行数を示す。

I. 1. 2. 59	ita expertus sis (Kn) —— ita ex aliqua parte bene expertus sis (Era, Mau, Jv, Kg, Dg)
I. 4. 11. 44	cupiditatum (Kn)—— cupiditatum (Era, Mau, Jv, Kg)
I. 7. 19. 1	* Hic ille: Primo, inquit (Era, Mau, Kn, Jv) cf. Hic ego primo inquam (Dg, Kg)
II. 1. 1. 27	* quem (Era, Mau, Kn) cf. quam (Jv)
II. 2. 3. 7	ad studia pergentem (Kn) —— ad pergrina studia pergentem (Era, Mau, Jv, Dg)
II. 2. 3. 13	tibi (Kn)—— tibi soli (Era, Mau, Jv, Dg)
II. 2. 5. 67	castissime (Mau, Kn, Jv)—— cautissime (Era, Dg)
II. 2. 6. 7	pomeria (Kn, Era)—— pomaria (Mau, Jv, Kg)
II. 7. 17. 35	paucissimus—— paucissimis (Era, Mau, Kn, Jv)
II. 13. 29. 7	suae (Kn, Mau, Jv)—— tuae (Era, Kg)
III. 3. 5. 3	differe —— differre (Era, Mau, Jv, Kn)
III. 4. 9. 67	* tute (Era, Kn) cf. tu te (Mau, Jv)
III. 9. 18. 8	monuit (Kn)—— mouit (Era, Mau, Jv)
III. 14. 30. 18	* tenebras tegens (Kn) cf. tenebrascens (Era, Mau, Jv)
III. 18. 40. 9	enim (Era, Mau, Kn, Jv) —— ergo nihil (Dg)
III. 19. 42. 18	* resipiscere (Kn) cf. respicere (Era, Mau, Jv) recipere (Dg)
III. 20. 44. 37	potest —— posset (Era, Mau, Jv, Kn, Kg)

CC にあって Stromata がない, CC の誤植について記載する。右が訂正分（誤植に類するものを載せることは, Kg の例に従うものである。彼は17箇所を挙げている）。

I. 1. 3. 66	uternoque	ueternoque
I. 1. 3. 68	quid	quod
I. 1. 4. 85	aiiudius	audius
I. 2. 6. 47	es	est
I. 3. 7. 16	excidsse	excidissee
I. 5. 14. 35	opiniior	opinior
I. 6. 16. 11	defensione	defensio
I. 6. 17. 16	diua	diu
I. 8. 22. 12	frutraque	frustraque
I. 8. 22. 19	sa	a
I. 8. 23. 28	Nulio	Nullio
II. 2. 3. 12	inlustrios	inlustrioris
II. 3. 8. 28	discipulis	disciplinis
II. 7. 17. 32	lgerant	legerant
II. 9. 22. 3	Acdemicos	Academicos
II. 13. 30. 37	Quaeriter	Quaeritur
III. 1. 1. 4	Arbritror	Arbitror
III. 3. 6. 56	reclmante	reclamante
III. 5. 11. 7	deese	deesse
III. 7. 15. 29	urbanitae	urbanitate
III. 9. 21. 61	uidico	iudico
III. 9. 21. 79	pericipi	percipi
III. 11. 24. 6	es	est
III. 11. 27. 67	diui	dixi
III. 13. 29. 38	isotrum	istorum
III. 17. 37. 16	subtililitatique	subtilitatieque
III. 17. 37. 29	opnionem	opinionem
III. 18. 40. 11	approabant	approabant
III. 18. 41. 43	mauime	maxime
III. 20. 45. 51	ista	iste

近代語訳については, 311 頁以下を参照されたい。

ま え が き

本書は、アウグスティヌスの *Contra Academicos* (以下 CA) についてこれまで論じてきた幾つかの論文をもとに、CA 研究という視点からあらためて書き下ろしたものである。私がこのアウグスティヌス最初期の著作のはらんでいる問題の重要性ないし革新性を強く意識するようになったのは、彼の中期や後期の著作を読んでいて、何かがもっと前で論じられているはずだという気がしてならず、遡って初期著作を読んでそこにたどり着いてからである。それは考えてみれば当然そこに（つまりはアウグスティヌスの出発点のところに）あるはずのものであったが、アウグスティヌスを読み始めた頃は概説的な研究や部分的な議論などから勝手に推測するばかりで読み飛ばしてきたから、この著作全体を初めて読んだとき私にはある種の衝撃に似た驚きがあった。興奮冷めやらぬまま中期著作にこの著作を結びつけて論じたのが1983年の論文であったから、それから15年も経ってしまった。

この間に私が発表してきたものは殆どが CA についてのものばかりで、周囲をあきれさせてきた（はずである）。他の著作も読まなかったわけではないのだが、いろいろな発表の機会ができると、最初のうち別のものを用意していても、どうしてもまた CA から始めねばならない気になるのだった。そのようにして、あの部分この部分と取り上げ、この視点からあの視点からとしつこく扱ってきたが、全体を一望できるかたちで提出しなければという気持ちが強くなって、このような形になった。回心ののち、何よりも先ず CA という挑戦的な論考に着手すると決めたとき、33歳というアウグスティヌスの若さと勢いが、複雑で技巧的な書き方へと傾かせたのではないかと私は思っている。従来の読み方に対して別の視点を提起しようとするなら、そのようなアウグスティヌスの書き方をどのように読み解いたかいちいち示す必要があるように思われ、結局、翻訳を含む形で上梓することにした。その上で註解の形式で論じることにしたから、夥しい脚注も含めて読者はしつこきに辟易されるのではないかと恐れているが、ともあれこのような形で発表することができたのは、私にとって望外の喜びである。このめんどろな仕事につきあって下さった創文社の小山光夫氏には、感謝の念とともに

に学術出版物へのその誠実な熱意に敬意を表したい。

アウグスティヌスに懐疑論批判の書があることを聞いたのは、恐らく学部学生の頃のデカルトの講義の折りだったと思う。そのころは、アウグスティヌスについても西洋中世思想についても何も知らなかった。少し経って卒論のテーマを決めるときになって、始めは現代のものをやるつもりだったが、いくらかの紆余曲折ののち、まるで何も知らないというところに惹かれて「中世」を覗いてみようなどと暢気にも思いついたのは、卒業までの一演習くらいに考えていたからである。ほんのわずかな予備知識をもとに、Bonaventuraの *Itinerarium Mentis in Deum* という「コンパクトな」著作を読むことにしたのだが、おぼつかないラテン語と膨大な参照箇所が悪戦苦闘した挙げ句、はっきり分かったことは、とにかくアウグスティヌスを読まなければならないということだけであった。そのまま大学院へ進んで、アウグスティヌスを読むことにしたのは、卒論で余りにも何も分からなかったからである。

そのころ、月に一回、「アウグスティヌス研究会」という在京の古代及び中世哲学の研究者からなる研究会が土曜日の午後大学の研究室で開かれていた。指導教官であった今道友信先生に言われて、ラテン語文盲に近い状態のまま入会したが（ちょうど助手であった先輩が就職されることになっていたから、お茶くみ要員が必要だったのだと今でも信じている）、10年間続いたこの研究会に私が参加したのは終わりの方の三分の一ほどだったと思う。入れていただいた当時は *De Doctrina Christiana* を読み始められた頃で、私がアウグスティヌスを読んだのはそれが最初である（この本を第二巻の途中まで読んだところで研究会は終わってしまったが、そのまま面白くなって第四巻まで読み続け、結局修士論文で扱うことになった）。右も左も分からぬまま、一人だけみそっかすで焦って勉強した(?)せいか、私にとっての中世に関する「先生」というと、先ずこの研究会が思い浮かぶ。

大学院に入ってから、ラテン語文献による哲学系のゼミが毎年一つはあったから、修士・博士課程のあいだに、今道先生の *De Ordine*、加藤信朗先生の *Confessiones*、中澤宣夫先生の *De Trinitate* の授業でアウグスティヌスを読むことになった。並行していくつかのラテン語文献を読む会に参加し、正式の「授業」ではないところでも、多くの方々から教えと励ましを頂いた。学外の授業に参加させて頂いたこともしばしばで、当時は八雲にあった都立大の夜間ゼミはあちこちの大学から集まった人たちの交流の場でもあった。九州に来てからも、自分の講義で身動きがとれなくなるまでは九大の稲垣良典先生、松永雄二先生の

授業に行かせていただいた。分け隔てなく惜しみなく機会を与えて下さった先生方にあらためて感謝したい。

この本ができるまでには、随分たくさんの方々のご直接間接の支援があった。折々に部分的に発表してきたその都度、アウグスティヌスや中世関係の研究者だけでなく、古代や近代、現代を専門とする方々にも議論の相手をして頂いた。文献入手の点でも、まるで行動力のない筆者を多くの方が助けて下さった。テキストのフローベן版は加藤武先生から、CSELと *Stromata* は、*Academica* の Reid 訳とともに中川純男氏から頂いた。珍しい *Drewniok* を東北大の書庫から探し出して分けて下さったのは神崎繁氏である。PL の全集は新島龍美氏のおかげで手に入れることができた。

出版に向けて具体的に動き出したのは、何人もの方々から本にするようにと親切に勧めて頂いて自分でもその気になりながら、何となくきっかけをつかめないで暢気に構えていたのを心配して、松永先生が翻訳部分を読みたいと仰って下さってからである。そのようにして先生は最後に背中を押して下さったことになったが、先生の貴重なお時間をそんなことで潰させたことに憤慨と仰天をした同業者の夫が残りの註解部分を読んでくれた。彼はこれまでに書いたものを知っていたから「今更」と思っていたに違いないが、読み始めると句読点にまで注文を付けるのだった。とはいえ、この本が少しでも読みやすくなっているとしたら、それはこの最も身近な畏友のおかげである。(その後初校を手伝ってくれた一廻り若い友人は、翻訳が日本語になっていないと文句を言っている。私は日頃彼女の文章力に敬意を抱いているから、「やれやれ」と思いつつも、原典のもつ情報を詰め込もうとする悪しき「学術的翻訳」に自分も陥っていることをしぶしぶ認めざるを得ない。)

この本の出版は、平成10年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の援助を受けてなされるものである。

1999年1月

岡部 由紀子

略 号 表
(詳細は巻末の文献表参照)

アウグスティヌスの著作

BV	<i>De Beata Vita</i>	PL	<i>Patrologica Latina</i>
CA	<i>Contra Academicos</i>	REAug	<i>Revue des études augustinienes</i>
CD	<i>De Civitate Dei</i>	RA	<i>Recherches augustinienes</i>
Conf.	<i>Confessiones</i>	SVF	<i>Stoicorum Veterorum Fragmenta</i>
Ep.	<i>Epistulae</i>		
Ord.	<i>De Ordine</i>		
Retr.	<i>Retractationes</i>		

人 名

キケロの著作

Ac.	<i>Academica</i>	Cic.	Cicero
Fin.	<i>De Finibus</i>	L&S	Long & Sedley [1987-1]
Hort.	<i>Hortensius</i>	Pl.	Plato
Inv.	<i>De Inventione</i>	Verg.	Vergilius
ND	<i>De Natura Deorum</i>		
Off.	<i>De Officiis</i>		
Tusc.	<i>Tusculanae Disputationes</i>		

その他

Enn.	Plotinus, <i>Enneades</i>		
AL	<i>Augustinus-Lexikon</i>		
BA	<i>Bibliothèque augustinienne</i>		
FC	<i>The Father of the Church</i>		
OLD	<i>Oxford Latin Dictionary</i>		

目 次

凡 例	v
略号表	vi
テキストについて	vii
まえがき	xi

第1部 『アカデメイア派論駁』研究序説

第1章 『アカデメイア派論駁』の成立	3
第1節 『アカデメイア派論駁』成立の背景	3
第2節 『アカデメイア派論駁』の主題	5
第2章 『アカデメイア派論駁』の真理論	14
第1節 問題の位置づけと展望	14
第2節 もう一つの懐疑論批判	17
第3節 二つの真理観	25

第2部 『アカデメイア派論駁』

第Ⅰ巻（第1章～第9章）	35
第Ⅱ巻（第1章～第13章）	67
第Ⅲ巻（第1章～第20章）	105

第3部 『アカデメイア派論駁』註解

第Ⅰ巻	165
第1章1～4節 ロマニアヌス宛て書簡	165
第2章5～6節 討論の開始	168
第2章5節：全体的問題の提示	169
第2章5～6節：第Ⅰ巻の問題の提示	170
第3章7節～第4章12節 知者 sapiens	174
第3章7～8節：キケロと懐疑論の紹介	175
第3章9節：人間の finis	177
第4章10～12節：誤謬の定義	181

第 5 章13節～第 8 章23節 知恵 sapientia	184
第 5 章13～15節：道	184
第 6 章16節：知恵の定義	186
第 6 章16～18節：透視者	187
第 7 章19節～第 8 章22節：反論.....	188
第 8 章22～23節：リケンティウスの知者	191
第 9 章24～25節 結 び	192
第II巻	195
第 1 章 1 節～第 3 章 9 節 ロマニアヌス宛て書簡	195
第 4 章10節～第 6 章15節 アカデメイア派の紹介	200
第 4 章10節：設定	200
第 5 章11～12節：アウグスティヌスによるアカデメイア派の紹介	202
第 6 章14～15節：アリビウスによるアカデメイア派の紹介.....	204
第 7 章16節～第 8 章21節 ジュニアメンバーとの討論	205
第 7 章16節～第 8 章21節：父親似のたとえ	205
同上：用語をめぐる問題	208
第 9 章22節～第13章30節 シニアメンバーの討論	210
第 9 章22節～第10章24節：第 1 の批判	211
位置づけ 自分自身の説得 譲歩形式 (probabile)	
用語上の争いと隠匿説	
第11章25節～第12章28節：第 2 の批判	218
設定 批判 分析 (逆接的構図) 討論	
第13章29～30節：確認	227
第III巻	229
第 1 章 1 節～第 2 章 4 節 序	229
第 1 章 1 節：導入	229
第 1 章 1 節～第 2 章 4 節：fortuna	230
第 3 章 5 節～第 6 章13節 シニアメンバーの討論 (その 2)	232
第 3 章 5 ～ 6 節：問題の提示	232
第 4 章 7 ～10節：自分は知っていると思う	241
知者の思い アリビウスの思い 理性	

第5章11節～第6章13節：assensio	246
同意保留説 譲歩形式 (uideri)	
第6章13節：締めくくり	249
第7章14節～第9章21節 連続講話	250
第7章14節：モノログの導入	250
第7章15節～第8章17節：アカデメイア派の評判	251
第9章18～21節：ゼノンの定義	252
哲学の敵 アルケシラース	
第10章22節～第13章29節 認 識	259
第10章22節：カルネアデス登場	260
第10章23節～第11章26節：自然学	262
哲学者の不一致 感覚・夢・狂気	
第12章27～28節：倫理学	269
第13章29節：論理学	271
第14章30節～第16章36節 同意と行為	272
第14章30～32節：知者の同意	272
誤 謬	
第15章33節～第16章35節：probabile と行為論	276
旧説－アブラクシア批判 旅人のたとえ	
第16章35～36節：姦淫のたとえ	281
第17章37節～第20章45節 哲学史と結び	284
第17章37節～第19章42節：二世界論と隠匿説	284
二世界論 隠匿説 新プラトン派	
第20章43節：権威と理性	290
第20章44～45節：結び	290
Appendix 1 『訂正録』第1巻第1章（第1節～4節）	293
Appendix 2 二つの用語法	298
Appendix 3 probable（補足）	304
文献表	311
索 引（人名・出典・事項・原典事項）	321

第 1 部

『アカデメイア派論駁』研究序説

第 1 章

『アカデメイア派論駁』の成立

第 1 節 『アカデメイア派論駁』成立の背景

『アカデメイア派論駁 *Contra Academicos*』¹⁾ (CA) は三巻からなり、第 I 巻と第 II 巻には手紙形式の序文が付せられている。全体は叙述形式の違いによって、「書簡部分」(第 I 巻第 1 章、第 II 巻第 1 章～3 章)、「対話部分」(書簡部分を除く第 I・II 巻の全体と、第 III 巻第 1 章～6 章、及び巻末の第 20 章第 44 節～45 節)、「モノローグ (連続講話) 部分」(第 III 巻第 7 章～第 20 章第 43 節) に分けることができる。全三巻が完成するまでの比較的短い間に、『幸福な生について *De Beata Vita*』(BV) 全一巻及び『秩序論 *De Ordine*』全二巻の一部が書かれた²⁾。執筆当時アウグスティヌスは、ミラノ郊外カシキアクムの友人の別荘に滞在し、療養しつつ洗礼を受ける準備をしていたとされるが、以上の著作はまとめて「カシキアクム対話篇」と呼ばれ、いずれもそこで共同生活を行っていた家族的な少数人からなるグループとの間でなされた討論の記録という体裁をとっている³⁾。

以上のような成立の背景は、この著作を全体として一つの連続性を持った論考として読むことの障害となると考えられてきた。第 I 巻とそれに続いて書き上げ

1) 書名の邦訳は研究者の間で定まっていない。これまでの拙論にも変遷があった。

2) *Retr.* I. 2, I. 3. 1 → 本書 5n. 10

3) 「カシキアクム対話篇」は、アウグスティヌスの誕生日 (11月13日) についての記述などから類推して、386年11月以降の短い期間の間に書き上げられたと考えられている。翌年初めにミラノで完成された *Soliloquia* を含めてそう呼ばれることもある。誕生日の後で書かれたことになっている CA の終結部では、アウグスティヌスの年齢は33歳であると言われている (III. 20. 43. 10-11)。「カシキアクム」の所在地については長く争われたが、Cassago Brianza が有力である (O'Daly, Cassiciacum, AL)。回心後、当時ローマ社会でエリートコースにあった修辞学教師の公職を退くことにしたアウグスティヌスは、受洗までの準備期間を教師生活の間に得た呼吸器系の病氣療養も兼ねて友人ウエレクンドゥス所有のカシキアクムの別荘で過ごした (*Ord.* I. 2. 5, *Conf.* 9. 2. 2-6. 14)。